

重圏文鏡の画期と意義

脇山佳奈

1. はじめに

重圏文鏡は弥生時代後期末から古墳時代前期にみられる青銅製の小型仿製鏡である。特に古墳時代初頭を中心に展開する鏡式であり、小型仿製鏡を考える上で欠かすことのできない鏡である。ただし小型であることから、この鏡には政治的な意味合いがどの程度のものであったのかという点については研究者によって意見が分かれている。本研究では重圏文鏡の編年、出土遺跡の検討、類似する古墳時代仿製鏡との関係、生産体制と分布について論じ、重圏文鏡の出現した背景や役割について述べたい。

2. 重圏文鏡の研究

重圏文鏡については、これまでにいくつかの分類や系譜に関する研究がある。ここでは研究史を概観し、これまでの研究とその問題点を整理する。

(1) 分類に関する研究

分類については、林原利明・藤岡孝司・今井堯・中井歩の研究がある。林原利明は、重圏文鏡は弥生時代仿製鏡の系譜を引くものと考え、舶載鏡と区別するために「小形重圏文仿製鏡」という名称を使用した。そして、円圏の圏数および外区の櫛歯文帯を基準として7つに大別した。特筆すべきことは、神奈川県駒形遺跡例のX線写真から「円圏に認められる文様状のもの」があると指摘し、円圏にみられる文様状のものと同様のものと珠文鏡の珠文との類似を指摘している点である（林原 1990）。

藤岡孝司は、重圏文鏡は弥生時代小型仿製鏡の影響を受けて出現すると考えた。重圏文鏡の内区文様と外区文様に着目して、5型式8類に分類を行った。分類は以下の通りである（藤岡 1991）。

I型 櫛歯文帯－円圏

II型 円圏のみ

III型 櫛歯文帯①－円圏－櫛歯文帯②－円圏

a類 櫛歯文帯①が斜行するもの b類 櫛歯文帯②が斜行するもの

c類 櫛歯文帯はすべて放射状に配されるもの

IV型 鋸歯文帯－櫛歯文帯－円圏

V型 櫛歯文帯－（円圏）－珠文状結線文－（円圏）

a類 円圏＋珠文状結線文のもの b類 a類＋鋸歯文帯のもの

今井堯は重圏文鏡の文様は大型・中型仿製鏡にみられる外区文様によって構成されることから、文様の省略によって出現したと述べ、重圏文鏡は仿製三角縁神獸鏡・獸形鏡・獸帯鏡などと別系統にはならないことを指摘した。重圏文鏡を2分類し、重圏文鏡1類は典型的な

重圏文鏡とし、重圏文鏡2類は、粗く幅広い櫛歯文が内区部位に一部はいりこんだ重圏櫛歯文鏡とする（今井 1991）。

中井歩は面径と鈕の幅の比率に注目して、重圏文鏡を大きく二つに分類している（中井 2014）。面径に対して鈕の幅の大きいものをA類、小さなものをB類とする。文様以外の形態的な特徴に着目しているという点において評価できると考えられる。

（2）「珠文状結線文」をもつ重圏文鏡の研究

最初に圏線上にみられる文様を「円圏に認められる文様状のもの」と指摘したのは林原利明である。茨城県勅使塚古墳例、千葉県駒形遺跡例、同県二又堀遺跡例、石川県西念・南神保遺跡例、岡山県忠明古墳例の5例を指摘し、京都府志高遺跡例はこれに類似するものと述べた（林原 1990）。その後、藤岡孝司はこの文様を「珠文状結線文と仮称する」とし、10例を紹介した。さらにa類として円圏+珠文状結線文のもの、b類としてa類+鋸歯文帯のものと細分した。さらに、時期を3段階に設定しており、Ⅰ期は弥生時代終末から古墳時代初頭、Ⅱ期は古墳時代前期、Ⅲ期は5世紀代として、Ⅰ期からⅢ期に向かって珠文状結線文上の文様（珠文状・鋸歯文）が明瞭化する傾向が窺われ、珠文鏡に連続する様相があると指摘した（藤岡 1991）。

新井悟は茨城県勅使塚古墳例を取り上げ、圏線上の珠文状の文様は意図されて彫り込まれたのではなく、鑄造時に生じた現象ではないかと推測している（新井 2009）。藤岡孝司も筈抜けの状態あるいは遺存状態などで不明瞭なものもあり、今後はX線写真で確認していく必要があると指摘している（藤岡 1991）。

（3）重圏文鏡の祖形・意義に関する研究

後藤守一は重圏文鏡を「圏を重ねたもの」と定義し、重圏文鏡の祖形を前漢式鏡であるとみなしており（後藤 1926）、仿製鏡であると考えていなかった。

小林三郎は、重圏文鏡の母型に関しては、前漢代の「日光鏡」や「明光鏡」や「四蛇鏡」であると推定し、弥生時代の小型仿製鏡と同じ母型であると述べた。また、方格規矩鏡や三角縁神獸鏡などとは系譜が異なると指摘し、古墳時代の初期仿製鏡には二大源流があると指摘する（小林 1979）。

高倉洋彰は弥生時代小型仿製鏡の検討を行い、その中で重圏文鏡についても論じており、弥生時代後期末の大阪府鷹塚山遺跡例が最も古いと述べている。重圏文鏡は、弥生時代小型仿製鏡である重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類が面径の縮小にともない、文様帯部分が二〜四重の円圏のみとなったものと指摘する（高倉 1972・1985・1995）。

弥生時代小型仿製鏡の検討を行った松本佳子は、（伝）菊池郡・阿蘇郡例が重圏文鏡に係する鏡であると示している（松本 2008）。

近年、筆者は銅鐸破片の検討を行い、近畿式銅鐸に特徴的な双頭渦文飾耳の渦巻き文様は、重圏文鏡における多重の圏線文様に影響を与えたと考えた（脇山 2015）。

このように祖形については、高倉・森岡・松本の弥生時代小型仿製鏡に連なるという見解、後藤や小林の舶載鏡を模倣するという見解、筆者の銅鐸文様からの影響も受けたという見解

がみられる。

また、森岡秀人は弥生時代小型仿製鏡の検討を行い、弥生時代における重圏文鏡系の鏡が、古墳時代小型仿製鏡である重圏文鏡・珠文鏡に連なると指摘した（森岡 1989）。

重圏文鏡の意義について論じたものには今井堯、林正憲の研究がある。今井は素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡の検討を行い、これらは、中・大型仿製鏡と同じ出土状況であること、重圏文鏡は近畿地方にもある程度分布することから、ランクは低いとしても、権威のシンボルであったと指摘している（今井 1991）。一方で林は、素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡は地域ごとの生産地があったと指摘し、これらの小型仿製鏡は、弥生時代後期以降、基本的なデザインに変化がなく、大型化を志向しないことから、政治的要素が極めて希薄であったと考える（林 2005）。南健太郎は宮崎県西ノ別府遺跡出土例を取り上げ、断面形は鈕を中心に沿り、鈕のみが突出するという特徴を指摘する。この重圏文鏡は他地域と異なる独自の技術は認められないこと、分布も点的であることから、西ノ別府遺跡周辺で生産されたものではないとし、他地域で生産されたものがもたらされたと考えている（南 2011）。

このように重圏文鏡はその祖形を何に求めるのか、製作地は各地域であるのか否か、政治的役割がどの程度であったのかという点については、研究者間で意見が異なっている。

3. 重圏文鏡の分類と編年

(1) 分類（第1・2図）

分類方法については、鏡背面の文様が最も重要な要素であると考えられる。藤岡孝司の分類を参考にし、重圏文鏡の内区外周の文様、珠文状結線文、段部分の有無に着目し、分類1類から7類に大別した。さらに、2・3・4・7類は細分を行っている。

圏線の説明を行う際には、一重の圏線は「圏線1」、二重の圏線は「圏線2」と表す。分類は以下の通りとする。

- 1類 一重の斜行櫛歯文帯と一重の直行櫛歯文帯をもつもの
- 2類 二重以上の櫛歯文帯をもつもの
- 3類 櫛歯文帯と鋸歯文帯をもつもの
- 4類 一重の櫛歯文帯をもつもの
- 5類 圏線のみであり、段部分をもつもの
- 6類 圏線のみであり、段部分をもたないもの
- 7類 珠文状結線文をもつもの

次に分類ごとに、遺跡名、圏線数、面径について述べる。重圏文鏡は、現状で105面あり、文様が明らかなものは88面である。

1類 一重の斜行櫛歯文帯と一重の直行櫛歯文帯をもつもの

計2面確認できる。大阪府鷹塚山遺跡（第1図1）、三重県向山古墳例がある。鷹塚山遺跡例は、鈕の周囲に直行櫛歯文帯－圏線2－斜行櫛歯文帯を配する。向山古墳例は、鈕の周囲に圏線1－斜行櫛歯文帯－圏線1－直行櫛歯文帯を配する。斜行櫛歯文は弥生時代小型仿

製鏡に配されるもので、古い様相を示している。

2類 二重以上の櫛歯文帯をもつもの

計6面確認できる。福岡県荻浦遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡⁽¹⁾、愛媛県新谷出土、京都府離湖古墳、静岡県長崎遺跡、千葉県北野5号墳例がある。2類は2つに細分でき、2a類は櫛歯文帯が連続しないもの、2b類は櫛歯文帯同士が連続するものとする。

2a類は青谷上寺地遺跡(第1図3)、長崎遺跡(第1図2)、北野5号墳例がある。長崎遺跡例は、鈕から外に向かって、櫛歯文帯—圏線1—櫛歯文帯となる。北野5号墳例は、鈕から外に向かって、圏線1—櫛歯文帯—圏線1—櫛歯文帯となる。青谷上寺地遺跡例は破鏡であり、櫛歯文帯—圏線5—櫛歯文帯となる。

2b類は荻浦遺跡(第1図4)、新谷出土、離湖古墳例があり、荻浦遺跡と新谷出土例は、圏線1で連続する二重の櫛歯文帯をもつ。離湖古墳例は、圏線3で連続する三重の櫛歯文帯である。2a類は櫛歯文帯が連続しないという点において、1類の斜行櫛歯文をもつ文様構成に類似する。このことから、2b類より古いと考える。

3類 櫛歯文帯と鋸歯文帯をもつもの

計6面確認できる。大分県亀の甲山古墳、福岡県鬼首古墳、福岡県立野遺跡、兵庫県大滝2号、群馬県神保下條遺跡、(伝)長野県川柳將軍塚古墳例がある。3類にみられる鋸歯文帯は、弥生時代小型仿製鏡にはみられないことから、3類は重圏文鏡の中で後出するものとして位置付けることができる。3類は櫛歯文帯と鋸歯文帯の配置から2つに細分できる。3a類は、櫛歯文帯の周囲に圏線、鋸歯文帯を配するもので、櫛歯文帯と鋸歯文帯が接していないものである。3b類は、内区外周に櫛歯文帯、外区に鋸歯文帯が配され、櫛歯文帯と鋸歯文帯が接しているものである。

3a類は神保下條遺跡例(第1図5)のみであり、鈕から外にむかって、圏線2—櫛歯文帯—圏線1—鋸歯文帯となる。面径は6.1cmである。鋸歯文帯は内区外周に配されている。鋸歯文帯が外区に配されていない点において3b類より古いと考えられ、1類の大阪府鷹塚山遺跡例の櫛歯文帯が二重に配されることと類似している。

3b類は亀甲山古墳、鬼首古墳、立野遺跡、大滝2号墳(第1図6)、(伝)川柳將軍塚古墳例がある。すべて圏線2である。面径は5.0~7.6cmである。

4類 一重の櫛歯文帯をもつもの

計34面確認できる。一重の櫛歯文帯をもつものは重圏文鏡の中で最も多く認められ、その出土地域も広い。宮崎県西ノ別府遺跡、佐賀県永田遺跡、福岡県谷遺跡、山口県朝田墳墓群8号墳、島根県大峠山古墳群、鳥取県博労町遺跡、広島県山ノ神1号墳、岡山県一宮天神山2号墳、愛媛県松木広田遺跡、愛媛県火内遺跡、香川県鉢伏山1号墳、兵庫県井の端7号墳、兵庫県藤江別所遺跡2面、兵庫県松本遺跡、大阪府久宝寺遺跡、(伝)和歌山県、和歌山県北田井遺跡、奈良県見田・大沢2号墳、京都府東禅寺1号墳、滋賀県下長遺跡、静岡県愛野向山Ⅱ遺跡12号墳、静岡県小深田西1号墳、静岡県土手上遺跡、石川県西念・南新保遺跡、石川県田中A遺跡、神奈川県宮前小台遺跡、神奈川県永塚下り畑遺跡、神奈川県梶山遺跡、

東京都伊興遺跡、千葉県戸張一番割遺跡、千葉県大竹遺跡、群馬県成塚向山1号墳、群馬県舞台遺跡例がある。

圏線1は、福岡県谷遺跡、山口県朝田墳墓群8号墳、兵庫県藤江別所遺跡2面、奈良県見田・大沢2号墳、京都府東禅寺1号墳、東京都伊興遺跡例の6面である。面径3.8～5.2cmである。

圏線2は佐賀県永田遺跡、愛媛県松木広田遺跡、香川県鉢伏山1号墳、島根県大峠山古墳群、岡山県一宮天神山2号墳、(伝)和歌山県、和歌山県北田井遺跡、滋賀県下長遺跡、静岡県土手山遺跡石棺墓、静岡県愛野向山Ⅱ遺跡12号墳、神奈川県梶山遺跡、神奈川県宮前小台遺跡、群馬県舞台遺跡例の13面である。面径は4.2～6.8cmである。

圏線3は愛媛県火内遺跡、兵庫県松本遺跡、石川県西念・南新保遺跡、千葉県戸張一番割遺跡、千葉県成塚向山1号墳例の5面である。面径は6.0～6.9cmである。

圏線4は宮崎県西ノ別府遺跡、広島県山ノ神1号墳、鳥取県博労町遺跡、静岡県小深田西1号墳、神奈川県永塚下り畑遺跡例の5面であり、面径は6.4～7.8cmである。

圏線5は久宝寺遺跡、田中A遺跡、大竹遺跡例の3面であり、面径は6.7～7.3cmである。

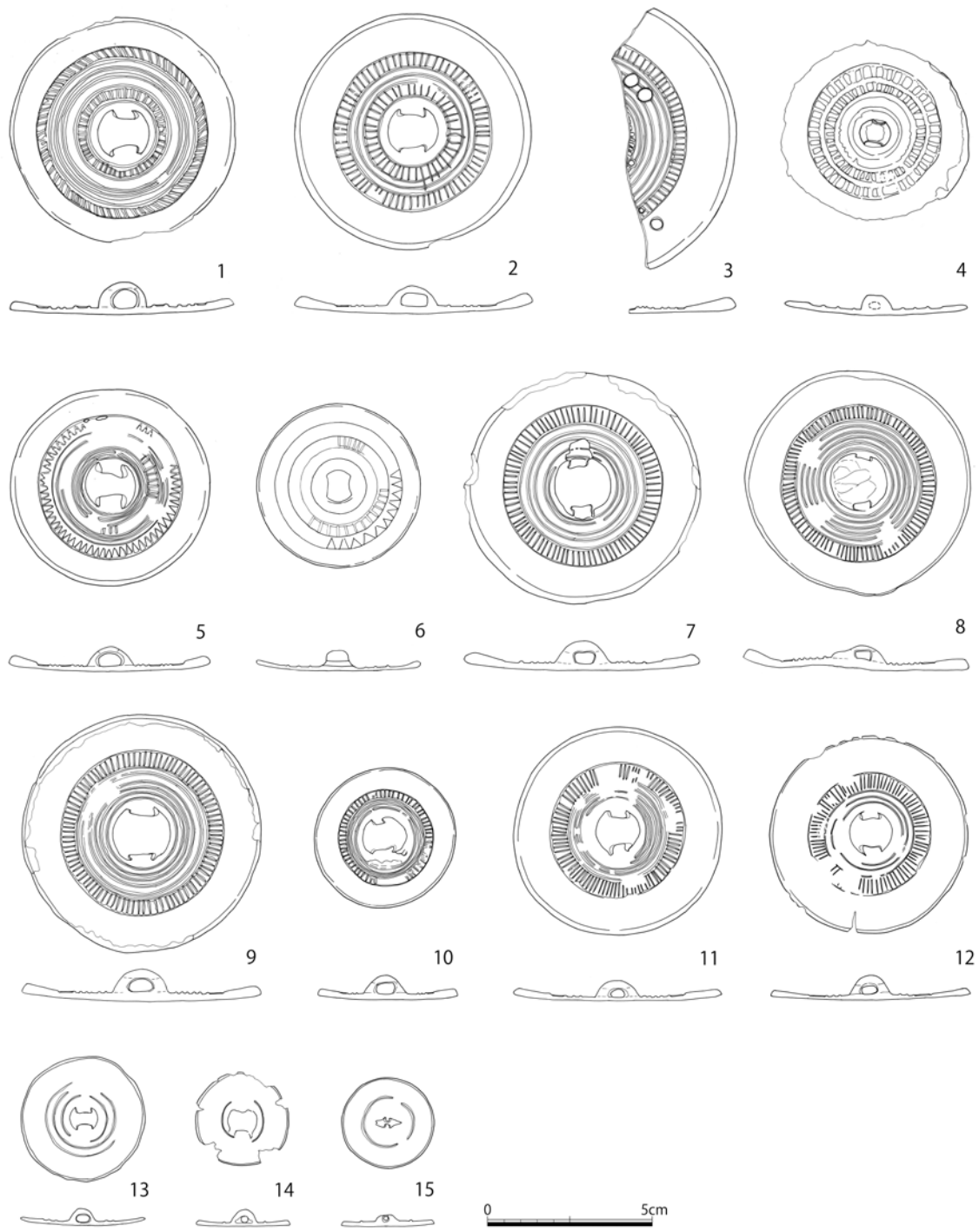
圏線6は井の端7号墳例であり、面径は7.9cmである。圏線の数が多くなるにつれて面径が大型になるといえる。

次に4類の鏡体厚を観察すると2mm前後の厚いものと1mm前後の薄いものとに分けることができる(第3図)。それぞれ厚いものを4a類、薄いものを4b類とする。4a類では宮崎県西ノ別府遺跡(第1図7)、佐賀県永田遺跡、兵庫県井の端7号墓、兵庫県松本遺跡、大阪府久宝寺遺跡(第1図8)、和歌山県北田井遺跡、滋賀県下長遺跡、静岡県小深田西1号墳、石川県西念・南新保遺跡例、石川県田中A遺跡、神奈川県永塚下り畑遺跡、神奈川県梶山遺跡、千葉県戸張一番割遺跡、千葉県大竹遺跡(第1図9)、群馬県舞台遺跡、群馬県成塚向山1号墳例がある。

4b類は山口県朝田墳墓群8号方形周溝墓、鳥取県博労町遺跡、広島県山ノ神1号墳(第1図11)、岡山県一宮天神山2号墳例(第1図12)、愛媛県松木広田遺跡、愛媛県火内遺跡、兵庫県藤江別所遺跡、静岡県愛野向山Ⅱ遺跡、静岡県土手上遺跡、東京都伊興遺跡例がある。

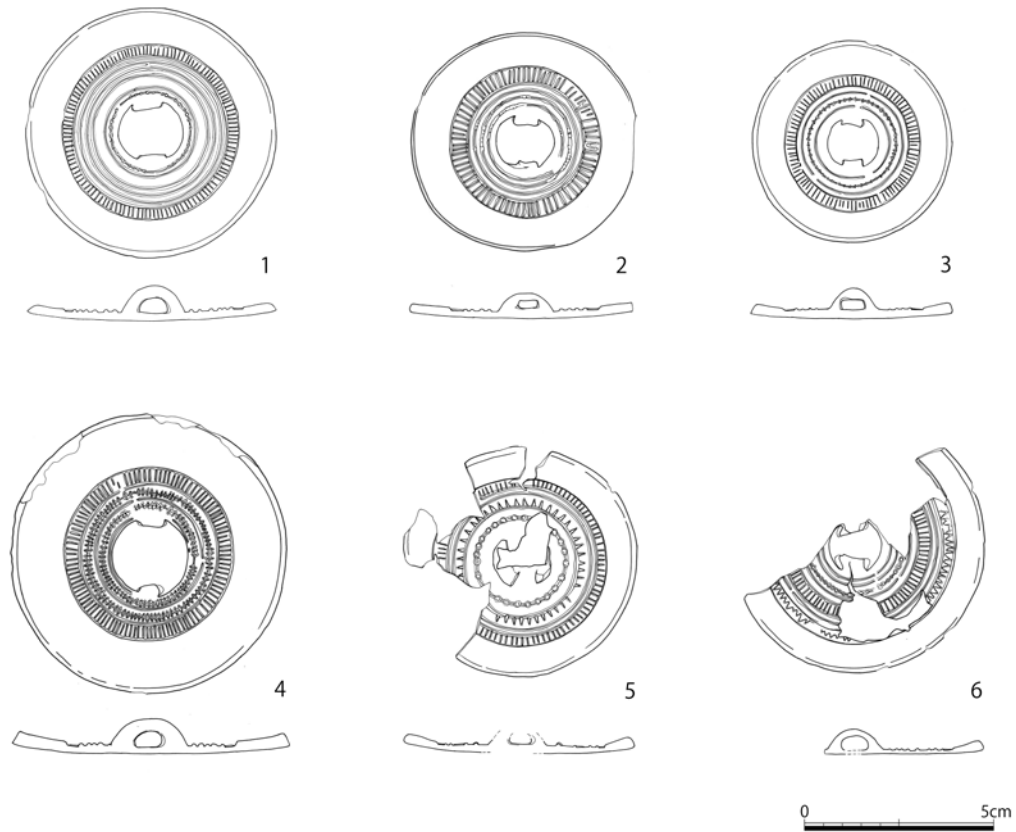
第3図をみると4a類は面径が7cmを越す大型のものもみられるが、その一方で4～6cmのものも一定数みられ、下長遺跡例(第1図10)のように面径4.2cmと小型のものもある。4b類は4a類と比べ面径が小型のものが多く、面径7cm以上のものはみられない。1類の鷹塚山遺跡例は、鏡体厚が2mmと厚いことから、鏡体厚は厚いものから薄いものへと変化すると考えられる。

4a類と4b類の違いは、櫛歯文の間隔にもみられる。第1表は、1cmにおける櫛歯文の本数を計測したものである。この表をみると、4a類は櫛歯文を1cmに6～8本を配するものが多いのに対し、4b類では9本以上のものが多くなる。なお、重圏文鏡の中でも斜行櫛歯文帯をもつ1類の鷹塚山遺跡例は1cmの幅に5本の櫛歯文が施されていることから、櫛歯文の間隔は広いものから狭いものに変化すると考えられる。



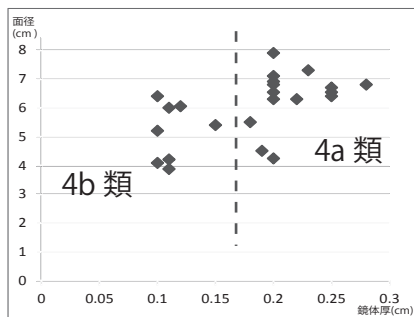
第1図 重圏文鏡の諸例 1

- (1類) 1. 大阪府鷹塚山遺跡
- (2a類) 2. 静岡県長崎遺跡 3. 鳥取県青谷上寺地遺跡
- (2b類) 4. 福岡県荻浦遺跡
- (3a類) 5. 群馬県神保下條遺跡
- (3b類) 6. 兵庫県大滝2号墳
- (4a類) 7. 宮崎県西ノ別府遺跡 8. 大阪府久宝寺遺跡 9. 千葉県大竹遺跡 10. 滋賀県下長遺跡
- (4b類) 11. 広島県山ノ神1号墳 12. 岡山県一宮天神山2号墳
- (5類) 13. 静岡県小深田西遺跡
- (6類) 14. 岡山県百間川沢田遺跡 15. 兵庫県吉田南遺跡



第2図 重圈文鏡の諸例2

(7 i 類) 1. 岡山県津寺遺跡 2. 岡山県津寺遺跡土坑 (7 ii 類) 3. 岐阜県龍門寺14号墳
 (7 iii 類) 4. 徳島県宮谷古墳 (7 iv 類) 5. 京都府志高遺跡 (7 v 類) 6. 佐賀県中隈山4号墳第3主体部



第3図 4類の細分

第1表 4類の櫛歯文の本数

分類 \ 櫛歯文本数	4	5	6	7	8	9	10	11
4a	1		4	4	3	1		
4b					2	3	1	1

※1cmにおける櫛歯文の数。

5類 圈線のみであり、段部分をもつもの

計9面確認できる。熊本県舞野2号石棺例、鳥取県長瀬高浜遺跡、兵庫県下坂部遺跡例、兵庫県藤江別所遺跡例、静岡県小深田西遺跡例（第1図13）、静岡県元宮川神明原遺跡例、長野県大熊片山古墳例、長野県篠ノ井遺跡例、千葉県西初石五丁目遺跡がある。

圈線1は西初石五丁目遺跡例である。面径は4.1cmである。

圈線2は下坂部遺跡、藤江別所遺跡、小深田西遺跡、元宮川神明原遺跡例がある。面径は3.7～6.3cmである。

圏線3は長瀬高浜遺跡、大熊片山古墳、篠ノ井遺跡例となっている。面径は3.2～4.3cmである。

圏線4は舞野2号石棺例である。面径は4.3cmである。

6類 圏線のみであり、段部分をもたないもの

計10面確認できる。福岡県稲光遺跡、香川県居石遺跡、岡山県百間川沢田遺跡（第1図14）、兵庫県藤江別所遺跡、兵庫県吉田南遺跡（第1図15）、大阪府溝咋遺跡、滋賀県高溝遺跡、三重県土山遺跡、新潟県西川内南遺跡、神奈川県万田熊ノ台遺跡例がある。

圏線1は稲光遺跡、居石遺跡、百間川沢田遺跡、藤江別所遺跡、吉田南遺跡、溝咋遺跡、西川内南遺跡、万田熊ノ台遺跡例がある。面径は2.8～3.6cmである。

圏線2は高溝遺跡、土山遺跡例である。面径は3.3～3.6cmである。

6類には鼻鈕もあり、吉田南遺跡と土山遺跡例がある。鼻鈕は素文鏡に多くみられるものであり、鼻鈕の素文鏡と重圏文鏡には密接な関係を想定できる。

7類 珠文状結線文をもつもの（第2図）

「珠文状結線文」とは、圏線の上に珠文、鋸歯文、櫛歯文をもつものとしている。今回、筆者は珠文状結線文と思われるものはすべて抽出しているが、津寺遺跡例などは珠文状結線文か判断の難しい資料である。計21面確認できる。佐賀県佐志中通遺跡、佐賀県中隈山4号墳、広島県毘沙門台遺跡、広島県下山手4号墳、鳥取県古郡家1号墳、岡山県津寺遺跡2面、愛媛県唐子台第5丘7号墳、香川県歩渡島1号墳、徳島県宮谷古墳、大阪府板持3号墳、大阪府小倉東遺跡E地区箱式石棺、京都府志高遺跡、滋賀県下味遺跡、福井県漆谷遺跡、愛知県寺林1号墳、山梨県平林2号墳、岐阜県龍門寺14号墳、千葉県駒形遺跡、群馬県淵名1号墳、茨城県勅使塚古墳例がある。さらに、珠文状結線文の間隔、圏線以外の櫛歯文帯や鋸歯文帯などの文様に着目して細分し、7 i～7 v類とした。

7 i類 内区外周に櫛歯文帯をもち、圏線上の文様はやや曖昧である。佐志中通遺跡、下山手4号墳、古郡家1号墳、津寺遺跡（第2図1）、津寺遺跡土坑（第2図2）、歩渡島遺跡、唐子台第5丘7号墳、下味遺跡、平林2号墳、淵名1号墳、駒形遺跡例がみられる。面径は5.0cm～7.0cmである。

7 ii類 内区外周に櫛歯文帯をもち、圏線上の文様は明瞭である。毘沙門台遺跡、小倉東遺跡、寺林1号墳、龍門寺14号墳（第2図3）、勅使塚古墳例がみられる。面径は5.3cm～7.8cmである。

7 iii類 内区外周に櫛歯文帯をもち、圏線上に線状の文様をもつもの。宮谷古墳例（第2図4）がみられる。面径は7.4cmである。

7 iv類 内区の圏線間に櫛歯文帯、内区外周に鋸歯文帯をもつもの。志高遺跡例（第2図5）がみられる。面径は6.1cmである。

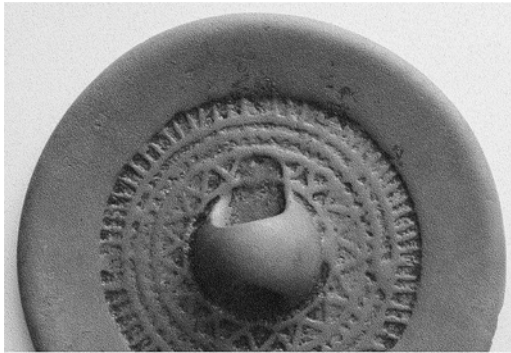
7 v類 内区の圏線間に櫛歯文帯、外区に鋸歯文帯をもつもの。中隈山4号墳例（第2図6）がみられる。面径は7.1cmである。

(2) 重圏文鏡の編年

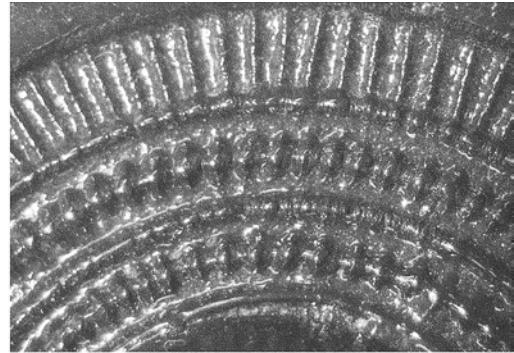
重圏文鏡は小型で銘文がないことから、中国鏡に直接その祖形を見出すことができないと判断する。1類から7類のなかで最も形態的に古い特徴をもつものは1類の大阪府鷹塚山遺跡例(第1図1)である。鷹塚山遺跡例は圏線の外側に斜行櫛歯文帯、内側に直行櫛歯文帯をもつものである。この鏡は鏡体に厚みがあり、鈕孔の形状は丸い。斜行櫛歯文帯は弥生時代小型仿製鏡に頻繁にみられる文様である。この文様をもつ九州系の弥生時代小型仿製鏡は、(伝)熊本県菊池郡・阿蘇郡例、佐賀県牟田寄遺跡例、岡山県山屋敷遺跡例などをあげることができる。(伝)菊池郡・阿蘇郡例は二重の斜行櫛歯文帯がみられ、連弧文銘帯鏡の連弧文帯が脱落したものである。牟田寄遺跡例や山屋敷遺跡例は、(伝)菊池郡・阿蘇郡例の内側の斜行櫛歯文帯がさらに脱落した文様構成である。これらの鏡は鷹塚山遺跡例と比較すると縁の幅が狭く、鏡の反りもないため、鷹塚山遺跡例とは製作方法では直接の関係にあるとは考えがたいが、文様には影響を与えていると考えられる。鷹塚山遺跡例はそのほかの近畿産の弥生時代小型仿製鏡と、断面形態や鈕孔の形状が類似する(田尻 2005・2012)。このことから、近畿地方における弥生時代仿製鏡製作技術と九州地方の弥生時代小型仿製鏡の文様から、近畿地方において重圏文鏡1類が出現したと判断できる。

第5図で示しているように、1類の影響を受けて出現したものは2類である。2類は二重以上の櫛歯文帯をもつものであり、1類の櫛歯文帯と斜行櫛歯文帯を一重ずつ配するものから、二重以上の直行櫛歯文帯を配するものへと変化したと考える。さらに2類からは3類が出現したと考える。3類は2類の外側の櫛歯文帯が鋸歯文帯へと変化したものと判断する。2類と同時期に4a類が生産され、日本列島の広い地域に拡散する。この文様については別稿で述べたが(脇山 2015)、筆者は銅鐸の双頭渦文飾耳にみられる渦巻き文様が多重の圏線の創出に影響を与えたと推測している。次に、4a類と文様構成が全く同じ4b類が出現する。4a類と4b類は青銅の原料が異なることによって鏡体厚の厚いものから薄いものへ変化するようになる(脇山 2015)。4b類からは外区と圏線を配する5類が派生し、5類から圏線のみ6類が派生したと考えられる。また、重圏文鏡4b類と珠文鏡は断面形態が類似すること、兵庫県藤江別所遺跡・香川県居石遺跡では珠文鏡と重圏文鏡が共伴することから、4b類と珠文鏡の生産は同じ場所で行われた可能性が高い。なお6類と円鈕の素文鏡も断面形態が類似することから、同じ場所にて生産されていた可能性が考えられる。

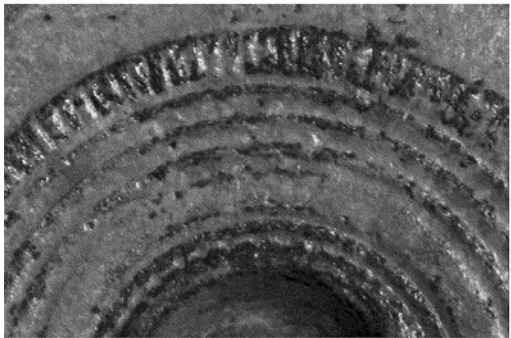
7i～7v類の中で最も古い文様を検討するために、珠文状結線文の祖形について考える。これまで珠文状結線文は重圏文鏡から出現すると考えられており、特に珠文状結線文の祖形について論じられることはなかった。弥生時代後期の小型仿製鏡のなかで珠文状結線文をもつものには、大阪府利倉南遺跡出土鋸歯文鏡例(第4図1)をあげることができる。利倉南遺跡例をみると、単線の鋸歯文帯と櫛歯文帯の間には、珠文状結線文をもつ圏線が一条配されている。この文様は珠文というよりは太い櫛歯文状を呈し、文様の間隔が非常に狭いという特徴がみられる。この文様に類似する重圏文鏡としては7iii類の宮谷古墳例をあげることができる。圏線状の文様の間隔が非常に狭く、櫛歯文状の文様を施す点も共通する。また



1. 大阪府利倉南遺跡（鋸齒文鏡）



2 徳島県宮谷古墳（7 iii類）



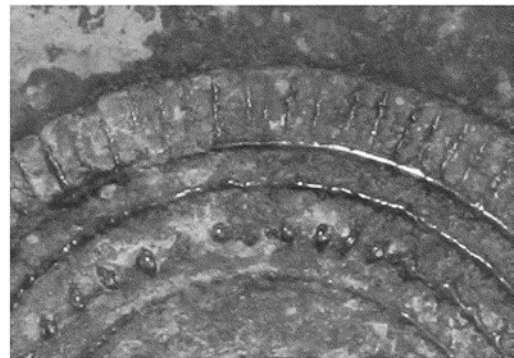
3 岡山県津寺遺跡（7 i類）



4 岡山県津寺遺跡土坑（7 i類）



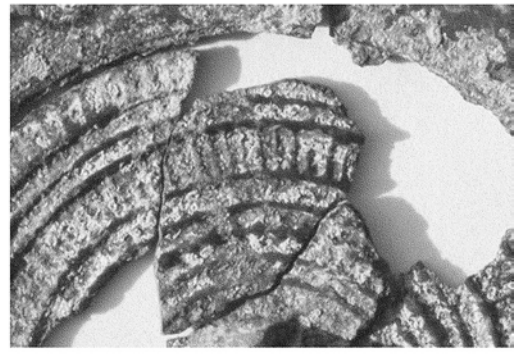
5 大阪府小倉東遺跡（7 ii類）



6 岐阜県龍門寺14号墳（7 ii類）

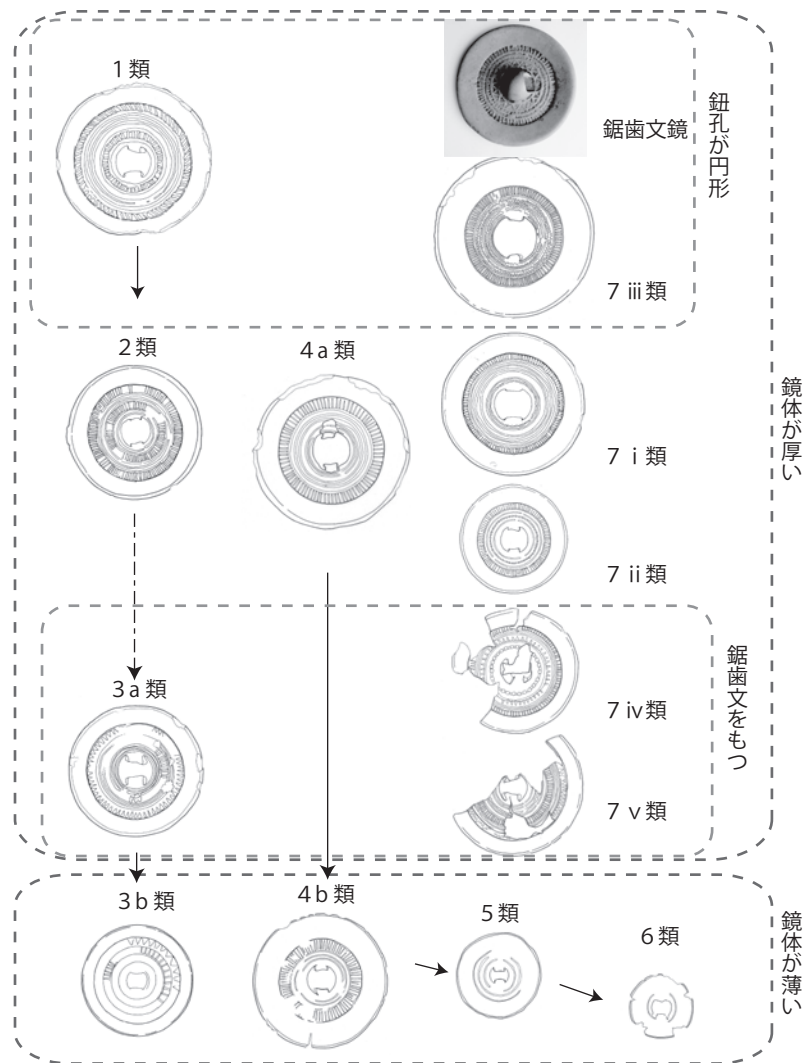


7 京都府志高遺跡（7 iv類）



8 佐賀県中隈山4号墳（7 v類）

第4図 珠文状結線文をもつ鋸齒文鏡と重圈文鏡（縮尺不同）



第5図 分類の関係図

宮谷古墳例は鈕が高く、鈕孔の形状は大型で丸い。宮谷古墳例は、弥生時代後期の利倉南遺跡例の鈕や鈕孔の形状に類似することから、珠文状結線文をもつ重圏文鏡の中で最も古いものとする。7 iii類の後に、珠文状結線文が曖昧で間隔の狭い7 i類が出現する。引き続いて7 i類の文様の間隔が広がり、明瞭となる7 ii類が出現し、次に鋸歯文帯をもつ7 iv類・7 v類が出現すると想定する。面径をみると4類・5類・6類は5 cm以下のものもあるが、7類の珠文状結線文をもつ重圏文鏡は5 cm以下のものは出土していない。したがって、重圏文鏡が小型化する時期には、珠文状結線文をもつ7類の製作は終了していたと考えられる。なお、珠文状結線文から珠文鏡が派生するという意見もあるが、断面形態が類似していないことから、珠文鏡とは直接の関係にないと判断する。

重圏文鏡の各分類で最も時期⁽²⁾が遡るものを指摘すると、1類の鷹塚山遺跡は弥生時代後期末である。2類の青谷上寺地遺跡例は前I期～前II期となる。北野遺跡5号墳は前III期～前IV期である。3類の立野遺跡は前III期～前V期である。4a類の井の端7号墳、永塚下り畑遺跡、大竹遺跡は前I期～前II期である。4b類の藤江別所遺跡は前II期～前III期である。

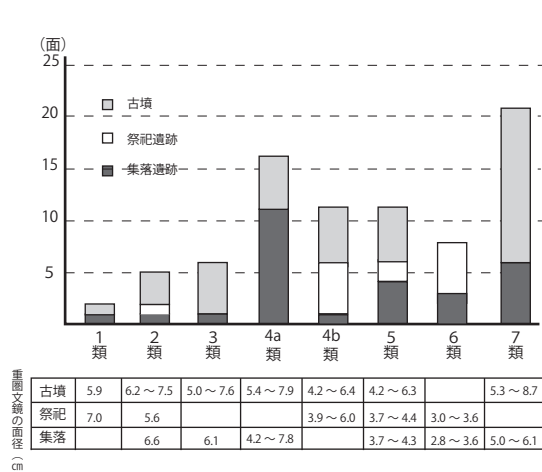
5類の舞野2号石棺、藤江別所遺跡は前Ⅱ期～前Ⅲ期である。6類の居石遺跡、藤江別所遺跡、西川内南遺跡は前Ⅱ期～前Ⅲ期である。7 iii類の宮谷古墳例は前Ⅰ期である。7 i期の津寺遺跡は前Ⅰ期～前Ⅱ期、7 ii類の毘沙門台遺跡は前Ⅰ期～前Ⅳ期、7 v類は前Ⅲ期であり、いずれも前期前半段階には出現していることが判明した。

重圏文鏡と類似する櫛歯文鏡について述べる。櫛歯文鏡は現在10面を確認している。これらは、櫛歯文帯以外の文様はすべて脱落していることから、面径は3.6～5.6cmと小型となる。また鏡の厚みも薄くなることから、重圏文鏡4b類・5類・6類と共通する要素が多い。時代の判明するものを指摘すると、長瀬高浜遺跡例は前Ⅱ期～前Ⅲ期、藤江別所遺跡例は前Ⅲ期～前Ⅳ期、大木遺跡は中Ⅲ期、宿山1号墳は中期、飯綱社古墳は中Ⅲ期～中Ⅳ期となる。櫛歯文鏡は前Ⅰ期のものはないことから、重圏文鏡よりやや遅れて出現していると判断する。高倉洋彰が指摘するように重圏文鏡の面径の縮小によって圏線が脱落したと考えられる(高倉 1995)。

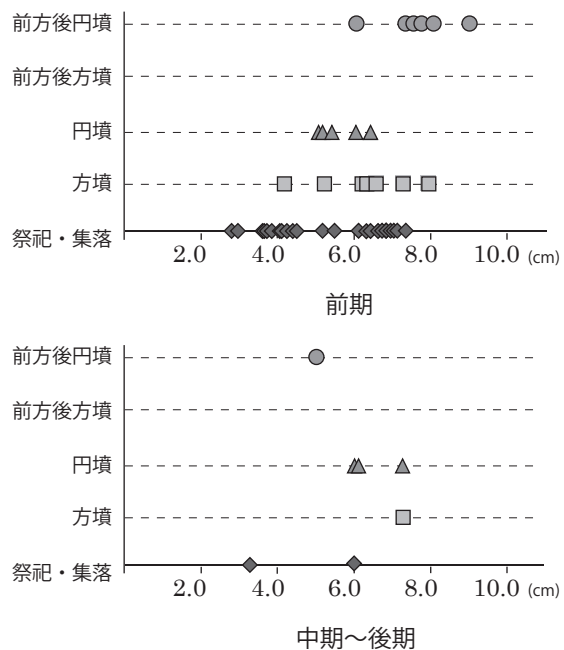
4. 重圏文鏡の性格

(1) 出土遺跡

重圏文鏡の流通と消費状況を探るために、時期ごとの分布、出土遺跡について検討を行う。ここでは出土地と文様が明らかなもののみを対象とした。まず出土遺跡の種類について論じる(第6図)。古墳出土の事例、集落・祭祀遺跡の事例の順番で述べる。分類ごとに古墳と集落・祭祀遺跡から出土する割合を述べると、105面のうち44面が古墳からの出土であり、59面が集落・祭祀遺跡出土である。そのほかは出土遺跡不明となっている。



第6図 分類ごとの遺跡の種類



第7図 遺跡の種類と面径の関係

古墳出土の出土数を述べると、1類は1面、2類は3面、3類は5面、4a類は5面、4b類は5面、5類は3面、7類は15面となる。なお、6類は1面も古墳から出土していない。1・2・3・4b類は古墳から出土する割合がおおよそ半分である。4a類・5類は約3分の1が古墳から出土する。6類は非常に小型のためか、古墳からの出土例はない。7類は約3分の2が古墳から出土し、重圏文鏡の分類の中で、古墳から出土する割合が最も高い。

古墳のうち墳丘形状の判明するものは、1類は前方後円墳で全長73mである。2類は方墳2例と墳形不明1例であり、方墳は辺長13.05×13.75m、辺長32×35mである。3類は5例のうち前方後円墳2例で全長20m・93mである。墳形不明2例である。4a類は方墳3例、円墳1例となる。4b類は方墳2例、円墳2例、前方後円墳1例である。4類は辺長10m代の方墳からの出土が多い。5類は方墳1例で、辺長14mである。墳形不明2例である。7類は前方後円墳3例、前方後方墳1例、円墳5例、方墳1例である。7類はほかの分類よりも古墳から出土する割合が高く、前方後円墳からの出土数も多い。墳丘規模が30m以上の古墳は6基あり、ほかの分類と比べると墳丘規模が大きい。

次に、集落・祭祀遺跡出土の重圏文鏡について述べる。105面中59面が集落・祭祀遺跡出土である。1類は包含層から1面である。2類は包含層1面である。3類は住居1面である。4a類は住居7面、溝2面である。4b類は海に関する祭祀1面、井戸2面である。5類は住居3面、井戸1面、包含層など出土状況が不明なもの2面である。6類は河川・溝・井戸など水に関するもの4面、集落内の土坑2面、山に関する祭祀1面、包含層2面である。7類は住居3面となる。

古墳出土のもの、集落・祭祀遺跡出土のものを比べると、2重の櫛歯文帯をもつ2類、櫛歯文帯と鋸歯文帯をもつ3類、珠文状結線文をもつ7類は古墳からの出土の割合が高くなる。一方で圏線のみで、段部分をもつ5類、圏線のみで、段部分のない6類は集落・祭祀遺跡から出土する割合が高く、古墳の副葬品としての役割は低いと考えられる。このことから、文様が複雑であり、面径の大きな2・3・7類が古墳から出土するのに対して、文様が単純であり、面径の小さな5・6類は祭祀・集落遺跡から出土すると判明した。重圏文鏡は文様の分類ごとにその役割は異なっていたと思われる。櫛歯文帯をもつ4類に関しては、4a類は集落遺跡からの出土が最も多く、4b類は山・井戸・海の祭祀遺跡からの出土がみられ、使用方法が大きく異なっている。仿製鏡は、古墳時代前期後半以降、集落の外から出土する事例が増加する(脇山 2012)。したがって、4a類と4b類とでは時期差があると判断できる。

遺跡の種類と面径の関係については第7図に示している。前期は、墳丘規模が円墳や方墳と比べ大型である前方後円墳からは、面径6cm以下の重圏文鏡は少なく、7cm以上のものが多い。重圏文鏡の中では大型のものが前方後円墳の副葬品となっていたようである。方墳や円墳からは7cm以上のものは少ない傾向がみられる。さらに、集落・祭祀遺跡出土の重圏文鏡は、方墳出土のもの比べると面径4cm以下のものが多いという傾向があり、集落・祭祀遺跡はより小型のものが使用されている。中期から後期は重圏文鏡の数量が少ないため、これだけで傾向を論じることは難しい。重圏文鏡の出土数をみると、前期に多く、中期から後

期は激減している。この要因としては前期段階で重圏文鏡の生産が終了するためと考えられる。

(2) 共伴する鏡について

重圏文鏡とほかの青銅鏡が共伴する遺跡は9例あり、古墳は4例、集落・祭祀遺跡は5例みられる。まず古墳の事例を説明すると、大分県亀甲山古墳では重圏文鏡3類と三角縁複波文帯三神三獣鏡、宮谷古墳は重圏文鏡7 iii類と三角縁銘帯六神四獣鏡・三角縁銘帯四神四獣鏡・三角縁唐草文帯二神二獣鏡片⁽³⁾、平林2号墳は重圏文鏡7 ii類と珠文鏡、川柳将軍塚古墳例は重圏文鏡3類と仿製内行花文鏡・四獣鏡・珠文鏡・乳文鏡、一宮天神山2号墳B主体部例は重圏文鏡4b類と振文鏡が共伴する。

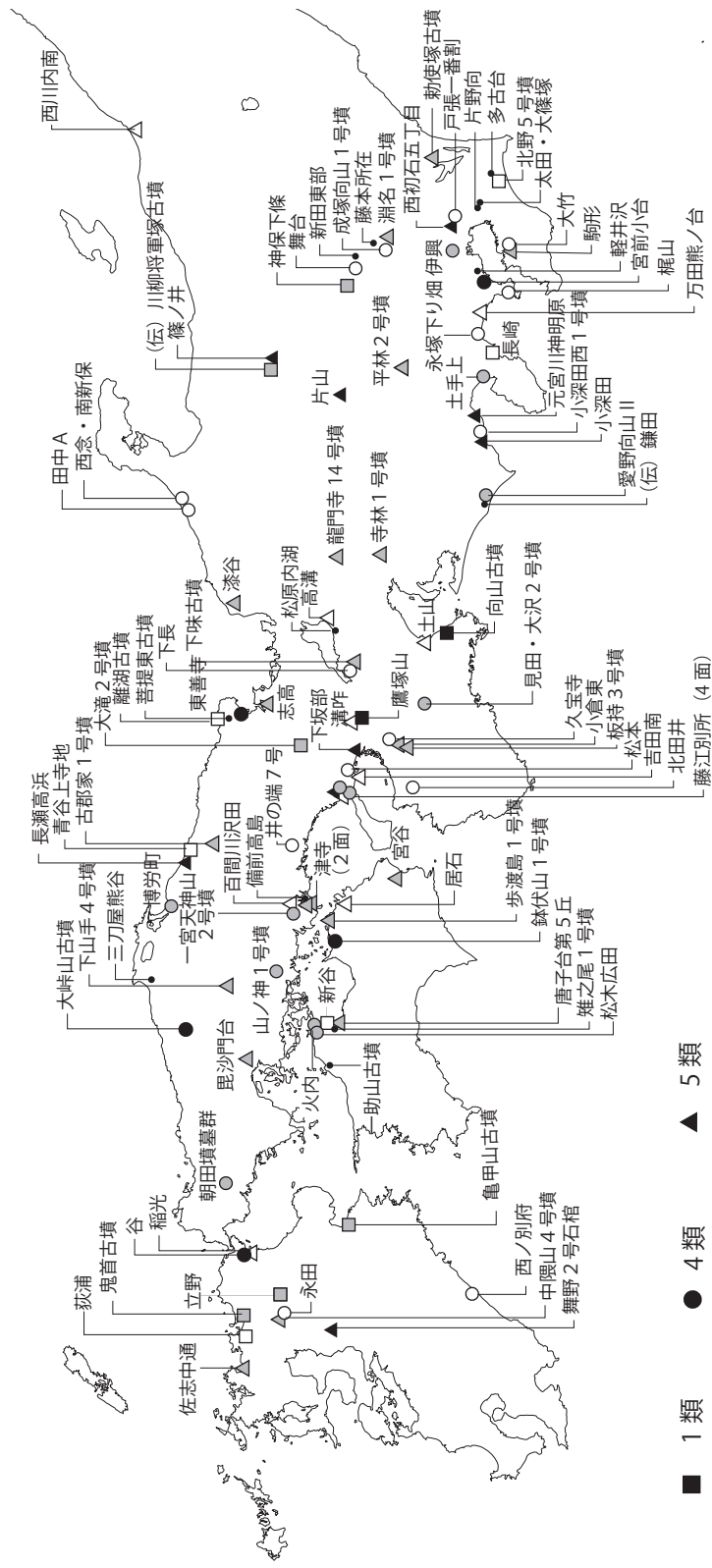
集落・祭祀遺跡のうち重圏文鏡と他鏡式のもの共伴する遺跡は5例を確認している。香川県居石遺跡、兵庫県藤江別所遺跡、滋賀県高溝遺跡、静岡県元宮川神明原遺跡、東京都伊興遺跡がある。このうち同じ遺構から出土したものには藤江別所遺跡と居石遺跡例がある。藤江別所遺跡では4b・5・6類の重圏文鏡が確認でき、共伴するものには素文鏡・櫛齒文鏡・珠文鏡があり、合計9面の小型仿製鏡が出土している。居石遺跡では重圏文鏡6類と素文鏡・珠文鏡が同じ遺構から出土している。また、同じ遺跡内から出土したものとして伊興遺跡例がある。伊興遺跡からは重圏文鏡4b類と珠文鏡が出土している。元宮川神明原遺跡例は重圏文鏡5類と素文鏡・仿製鏡片が出土している。高溝遺跡は重圏文鏡6類と素文鏡が出土している。高倉洋彰が指摘するように(高倉 1995)、小型化の進んだ重圏文鏡は、そのほかの小型仿製鏡とセットで用いるようになり、祭祀具として機能したと考えられる。

(3) 重圏文鏡の生産体制の考察

重圏文鏡の製作について踏み込んで論じているものには林正憲・南健太郎の研究がある。林は石川県西念・南新保遺跡、田中A遺跡の2面は圏線が鈕と重なり、鈕が中心に位置して



第8図 類似する資料の比較(等倍)



第9図 重圈文鏡の分布

いないという特徴があり、これは挽型を引いた後に鈕を削り出す方法を用いているとし、中・大型仿製鏡にはみられない技法であることから、各地域における小規模な仿製鏡生産の可能性を想定している（林 2005）。ただし、この2面の鏡は共に流通によって別の地方からもたらされたという想定もでき、重圏文鏡を石川県で製作したと断定することは難しいと思われる。

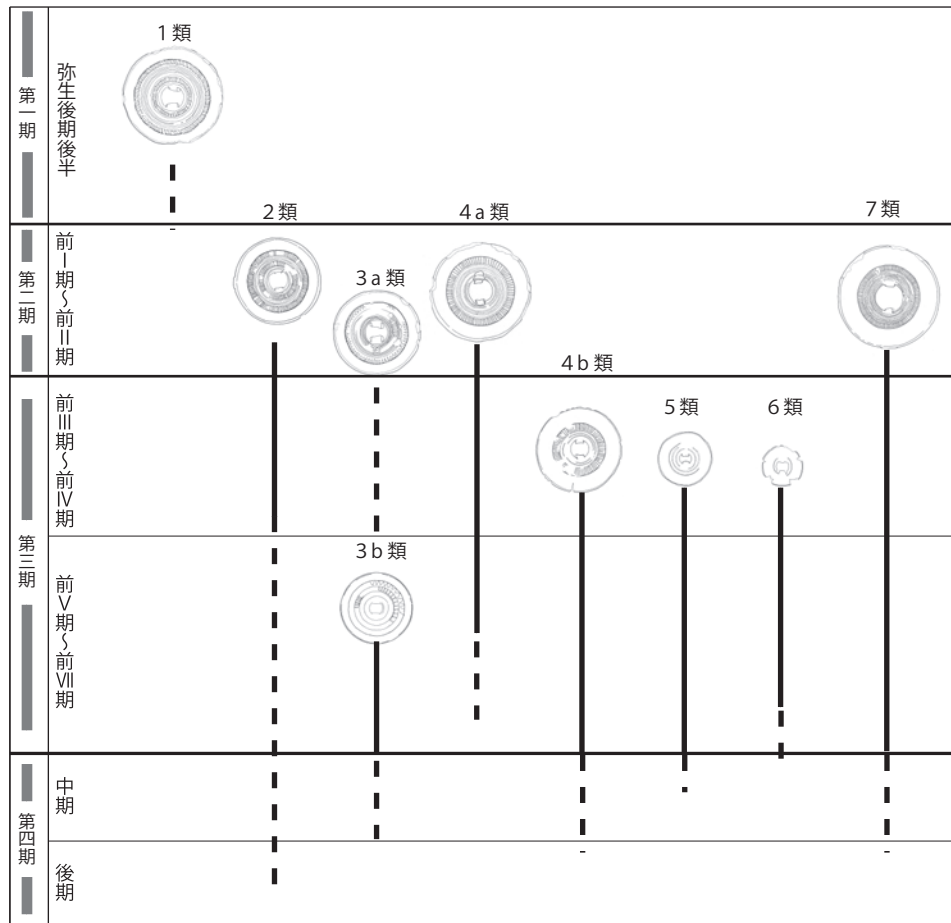
南健太郎は宮崎県西ノ別府遺跡出土例を取り上げ、断面形は鈕を中心に沿っていること、鈕のみが突出するという特徴を指摘する。さらに、この重圏文鏡は他地域と異なる独自の技術はないこと、分布も点的であることから、西ノ別府遺跡周辺で生産されたものではないとする（南 2011）。北部九州製小型仿製鏡の拡散とは異なるものであり、この地域に近畿地方との地域間関係を強く表す多くの物質がもたらされていることから、他地域で生産されたものがもたらされたと考えている。

そこで筆者は、最も南から出土している宮崎県西ノ別府遺跡例と最も類似する鏡を比較し、重圏文鏡の製作地について推測する。まず、西ノ別府遺跡（第1図7、第8図1）の位置する九州地方から出土している重圏文鏡について紹介する。九州から出土する重圏文鏡は合計7面あり、1類は佐賀県牟田寄遺跡例、2類は福岡県荻浦遺跡例、3類は大分県亀甲山古墳例、4類は佐賀県永田遺跡、宮崎県西ノ別府遺跡例、5類は大分県舞野2号石棺例、6類は福岡県稲光遺跡例である。西ノ別府遺跡例は4a類で面径7.2cmである。圏線4であり、鏡体厚3.0mm・重量40gである。永田遺跡例も4a類で面径6.0cmであるが、鈕の鏡背からの高さが0.9cmと非常に高く、幅1.3cmと幅広い。西ノ別府遺跡と比べると縁の厚みがあり、鈕孔が方形という点で類似するものの、酷似するものではなく、九州地方では今のところ類例は見当たらない。

九州地方以外から類例を探すと、最も類似するものとして、千葉県大竹遺跡例（第1図9、第8図2）・大阪府久宝寺遺跡例（第1図8、第8図3）をあげることができる。大竹遺跡例は圏線5で面径7.3cm、鏡体厚3.1mm・重量70gである。大竹遺跡例と西ノ別府遺跡例は鏡体の厚みのほか、縁や鈕孔の大きさまで類似しており、共通性が高い。鏡背面に赤色顔料を塗りこむという点でも共通している。大竹遺跡例の鈕孔は摩耗のため形状は楕円となる。大阪府久宝寺遺跡例は面径6.7cm、鏡体厚2.5mm、重量65gであり、西ノ別府遺跡例に比べ小型であるが、鈕孔が方形であること、面径にしめる鈕の大きさなどが類似している。

この検討から、重圏文鏡は遠距離間で類似する資料が出土することが判明した。さらに、4類のなかで鏡体の厚みのある4a類については、大型の方形の鈕孔をもつものが大部分であり、この鈕孔の形状には地域性を見出すことができない。したがって、近畿地方を中心とした地域で製作された重圏文鏡が、各地に流通していたと判断する。

それ以前の弥生時代小型仿製鏡は、各地域で製作遺跡がみられることから、各地域で生産・消費していたことが確実に把握できる。また弥生時代小型仿製鏡の文様については、各地域によって異なっている。その一方で重圏文鏡は広い範囲で共通する文様をもつことから、弥生時代小型仿製鏡とは異なる生産体制であったと考えたい。ここで、具体的に重圏文鏡の分布（第9図）をみると、櫛歯文帯をもつ4類は宮崎県から栃木県までの非常に広範囲にみら



第10図 重圏文鏡の画期

れることがわかる。特に4類は九州北部、瀬戸内海、近畿地方、関東地方を中心に出土している。この状況を見ると、重圏文鏡は、各地で生産され、異なる文様の鏡が出現した弥生時代小型仿製鏡とは全く異なる流通システムが存在していたと推測できる。また重圏文鏡の全ての分類が近畿地方において出土していることも注目できる点である。このことも近畿地方を中心として重圏文鏡が生産された根拠とする。

(4) 重圏文鏡の画期 (第10図)

重圏文鏡の画期についてはこれまでの文様と、製作の特徴を示す鈕孔形態と鏡体の厚みから設定している。重圏文鏡の鈕孔形態については、方形のもの、半円形のもの、円形のものがある。その他は鈕が小さく鈕孔の形状も不整形や楕円形であり、曖昧なものである。重圏文鏡の多くは、方形鈕孔が多い。鏡体の厚みの違いについては、原料の違いが大きな要因と考えられる。以前、筆者は馬淵久夫や平尾良光らによる重圏文鏡と櫛歯文鏡の鉛同位体比の分析結果(馬淵・平尾 1990など)をまとめており(脇山 2015)、重圏文鏡・櫛歯文鏡の鉛同位体比は、華北産の原料を用いた弥生時代青銅器の分布に重なるものと、華南産の原料を用いた古墳時代青銅器の分布に重なるものの両方がみられることが判明した。重圏文鏡は、当初は弥生時代の青銅器の原料を用いて、鏡体に厚みがあり、大型の円形・方形鈕孔をもつ

ものが作られ、次第に古墳時代小型仿製鏡の原料を用いて、鏡体が薄く、小型の方形鈕孔や楕円形の鈕孔をもつものが製作されると考える。

四つの画期について説明する。第一期は、鈕孔が円形であり、鏡体が厚いものがみられる。遺跡の時期は弥生時代後期後半である。第二期は鈕孔が大型の方形となり、鏡体が厚いものが多くみられる。4a類・7類がその代表である。遺跡の時期は前Ⅰ期～前Ⅱ期である。第三期は鏡体が薄くなり、小型化が進む段階である。鈕孔も小型となる。この段階には重圏文鏡4b類・5・6類が中心を占める。さらに外区に鋸歯文帯をもつ3b類も加わる。この段階の重圏文鏡と珠文鏡や円鈕の素文鏡の断面の形態が類似することから、この段階に珠文鏡や素文鏡の生産も盛んになると考える⁽⁴⁾。出土する遺跡の時期は前Ⅲ期～前Ⅶ期である。ただし、製作年代は遡ると考えている。第四期は重圏文鏡の衰退期である。鼻鈕をもつ重圏文鏡などが新たに出現する。それ以外は前Ⅶ期までに製作されたものが伝世したと考える。遺跡の時期は中期から後期である。

5. まとめ

重圏文鏡は小型であることから、これまでも政治的な意義の程度については多くの意見があったが、今回の検討を通じて、重圏文鏡は弥生時代終末期から古墳時代初頭における大和王権の統一と共に、広域的に分布した古墳時代の威信財であると判断するに至った。重圏文鏡はその原料が弥生時代の青銅器に使用された華北産から古墳時代の青銅器に使用された華南産へと次第に変化することからも、弥生時代から古墳時代へと移り変わる時期に生産された特殊な鏡であるといえる。重圏文鏡の中には、遠距離間で類似するものが確実に存在しており、同一の場所で生産されたものが各地に拡散し、共通の祭祀を執り行っていたと考える。生産地については、近畿で生産された弥生時代小型仿製鏡と類似していること、遠隔地間で類似する重圏文鏡の一つが近畿地方にみられることから、重圏文鏡が近畿地方で生産されたと結論付ける。

重圏文鏡は古墳時代前期において日本列島の各地域で出土例が数多くみられる状況を加味すると、古墳時代の初期に権威を付与された仿製鏡として、大和王権下での生産・配布が始まったと考えられる。重圏文鏡は古墳時代の開始と共に、大和王権の階層システム作りの一端を担うものであったことは明らかである。分布状況を見ると、宮崎県から茨城県までみられ、特に、東京湾沿岸、利根川水系、駿河湾、瀬戸内海沿岸、日本海側の鳥取県、九州地方北部において分布が密であり、このような場所は大和王権にとって古墳時代初頭の重要な拠点となる地域であったことがうかがえる。

謝 辞

本論文は2014年9月に提出した博士論文の一部である。論文作成においては指導教官の古瀬清秀教授をはじめ、竹広文明先生、野島永先生からは多くのご高配を賜りました。広島大学考古学研究室の先輩後輩諸氏からも多くのご助言をいただきました。英訳については

Xavier Michel-Tanaka 氏にご指導をいただきました。心より感謝いたします。また資料調査や資料掲載において関係各機関にはお世話になりました。記して感謝いたします。

石坂茂・一山典・稲原昭嘉・井上文男・岩尾峯希・岩本貴・大川泰広・大竹憲昭・岡田俊彦・亀井修一・河合章行・川口徳治朗・川崎保・北森さやか・楠正勝・小林健二・近藤協・笹川龍一・柴田英樹・清水篤・島田和孝・島田拓・下村節子・鈴木源・角信一郎・高橋方紀・多田彰・谷重豊季・田中正弘・丹野拓・茶屋満・椿原靖弘・戸潤幹夫・名本二六雄・奈良佳子・能城秀喜・乗安和二三・伴野幸一・平山誠一・細川金也・増田鉄平・松田清孝・丸毛のぞみ・三浦俊明・宮川紳・村山功志・村上幸雄・毛利義嗣・森井健司・門田了三・安田滋・山田義範

(五十音順・敬称略)

安土城考古博物館・明石市立文化博物館・足立区立伊興遺跡展示館・足立区立郷土博物館・石川県立歴史博物館・今治市教育委員会・(公財)愛媛県埋蔵文化財センター・(公財)大阪府文化財センター・岡山理科大学考古学研究室・岡山県古代吉備文化財センター・柏市教育委員会・神奈川県立歴史博物館・金沢市埋蔵文化財センター・唐津市教育委員会・上郡町教育委員会・岐阜市歴史博物館・基山町教育委員会・神戸市教育委員会・佐賀県文化財調査研究資料室・佐賀市文化財資料館・静岡県埋蔵文化財センター・袖ヶ浦市郷土博物館・善通寺市教育委員会・総社市埋蔵文化財学習の館・高松市歴史資料館・徳島市立考古資料館・鳥取県埋蔵文化財センター・豊中市教育委員会・長野県立歴史館・(公財)枚方市文化財研究調査会・府中市歴史民俗資料館・舞鶴市教育委員会・宮崎県埋蔵文化財センター・三次市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター・焼津市歴史民俗資料館・八尾市立歴史民俗資料館・(公財)山口県埋蔵文化財センター・山武市教育委員会・山梨県立考古博物館・湯梨浜町教育委員会・与島資料館・和歌山県立紀伊風土記の丘

(五十音順)

註

- (1) 青谷上寺地遺跡例については、面径がほかの重圏文鏡よりも大きな点、銅質の良さなどから中国鏡という意見もあるが(岡村 2011)、鑄上がりのよい例としては徳島県宮谷遺跡例や鳥取県博労町遺跡例などを指摘できる。面径については青谷上寺地遺跡出土例は復元径9.1cmと重圏文鏡では最も大きい、次に大きなものとして鳥取県古郡1号墳例は面径8.7cmであり、近い面径のものも存在する。さらに、鳥取県博労町遺跡例は青谷上寺地遺跡と同様に破鏡で、穿孔の痕跡がみられる。以上の理由から青谷上寺地遺跡例は中国鏡というよりは、仿製鏡の可能性が高いと考え、本論では仿製鏡に含めて検討した。
- (2) 古墳時代の年代は大賀克彦氏による編年(大賀 2002・2012)を用い、前I期から前VII期、中I期から中IV期、後I期から後IV期と表記した。時期を細分できないものは、前期、中期、後期と表記する。前期は3～4世紀、中期は5世紀、後期は6世紀～7世紀初頭である。
- (3) 三角縁神獸鏡の名称は樋口隆康による名称を使用した(樋口 2000)。
- (4) 以前筆者は珠文鏡について検討している(脇山 2013)。櫛歯文帯のみで構成される珠文鏡D-B類はもっとも古い文様構成の一つであり、重圏文鏡4b類と類似性が高いことを指摘する。

挿図・付表出典

第1図 4は岡部編 2008よりトレース、6は富田・亥野・勇・大路編 1981よりトレース、それ以外は筆者実測。1は枚方市教育委員会蔵、2は静岡県埋蔵文化財センター蔵、3は鳥取県埋蔵文化財センター蔵、5は群馬県教育委員会蔵、7は宮崎県埋蔵文化財センター蔵、8は八尾市立歴史民俗資料館蔵、9は袖ヶ浦市教育委員会蔵、10は守山市教育委員会蔵、11は府中市教育委員会蔵、12は岡山理科大学考古学研究室蔵、13は焼津市教育委員会蔵、14は岡山県古代吉備文化財センター蔵、15は神戸市教育委員会蔵。

第2図 筆者実測。1・2は岡山県古代吉備文化財センター蔵、5は枚方市教育委員会蔵、3は岐阜市歴史博物館蔵、4は徳島市立考古資料館蔵、5は舞鶴市教育委員会蔵、6は基山町教育委員会蔵。

第3図 筆者作成。

第4図 筆者撮影。1は豊中市教育委員会蔵、2は徳島市立考古資料館蔵、3・4は岡山県古代吉備文化財センター蔵、5は枚方市教育委員会蔵、6は岐阜市歴史博物館蔵、7は舞鶴市教育委員会蔵、8は基山町教育委員会蔵。

第5～7図 筆者作成。

第8図 筆者撮影・作成。1は宮崎県埋蔵文化財センター蔵、2は袖ヶ浦市教育委員会蔵、3は八尾市立歴史民俗資料館蔵。

第9図～第10図 筆者作成。

第1表 筆者作成。

引用・参考文献

- 新井 悟 2009 「古墳時代小形倣製鏡と製作技術の検討 重圈紋鏡と珠紋鏡」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』3号、アジア鑄造技術史学会、16～19頁。
- 今井 堯 1991 「中・四国地方古墳出土素文・重圈文・珠文鏡—小形倣鏡の再検討 I—」『古代吉備』第13集、古代吉備研究会、1～26頁。
- 大賀克彦 2002 「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会、1～20頁。
- 大賀克彦 2012 「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨』第13回播磨考古学研究集会実行委員会、47～55頁。
- 岡部裕俊編 2008 『荻浦』前原市教育委員会。
- 岡村秀典 2011 「青谷上寺地遺跡出土の漢鏡」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告36、鳥取県埋蔵文化財センター、77～88頁。
- 後藤守一 1926 「仿製鏡に就いて」『漢式鏡』雄山閣、877～897頁。
- 小林三郎 1979 「古墳時代初期倣製鏡の一側面—重圈文鏡と珠文鏡—」『駿台史学』46、明治大学史学地理学会、78～96頁。
- 高倉洋彰 1972 「弥生時代小形倣製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号、日本考古学会、1～30頁。
- 高倉洋彰 1985 「弥生時代小形倣製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第3号、日本考古学会、94～121頁。
- 高倉洋彰 1995 「弥生時代小形倣製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』高松市教育委員会、147～163頁。
- 田尻義了 2005 「近畿における弥生時代小形倣製鏡の生産」『東アジアと日本—交流と変容』第2号、九州大学21世紀COEプログラム（人文科学）、29～45頁。
- 田尻義了 2012 『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会。
- 富田好久・亥野 彊・勇 正広・大路 靖編 1981 『大滝2号墳』西紀・丹南町教育委員会。
- 中井 歩 2014 「重圈文鏡の生産と流通」『平成26年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会、

62～68頁。

- 林 正憲 2005 「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室、267～290頁。
- 林原利明 1990 「弥生時代終末～古墳時代前期の小形仿製鏡について」『東国史論』第5巻、群馬考古学研究会、49～64頁。
- 藤岡孝司 1991 「重圏文鏡（製）鏡小考—3～4世紀における—小形仿製鏡の様相—」『君津郡市文化財センター研究紀要V—設立10年記念論集—』財団法人君津郡市文化財センター、57～75頁。
- 松本佳子 2008 「瀬戸内海における弥生時代小形仿製鏡の研究」『地域・文化の考古学—下條信行先生退官記念論文集—』愛媛大学法文学部考古学研究室、273～302頁。
- 馬淵久雄・平尾良光 1990 「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』第75巻第4号、385～404頁。
- 南 健太郎 2011 「重圏文鏡の生産・拡散とその意義—南九州における検討から—」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』5号、アジア鑄造技術史学会、31～34頁。
- 森岡秀人 1989 「鏡」『季刊考古学』第27号、雄山閣出版、47～52頁。
- 脇山佳奈 2012 「祭祀遺跡・集落遺跡出土の仿製鏡」『舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告書』広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告第2冊・舞鶴市文化財調査報告第46集、広島大学大学院文学研究科考古学研究室・舞鶴市教育委員会、65～71頁・76～81頁。
- 脇山佳奈 2013 「珠文鏡の研究」『史学研究』第279号、広島大学史学研究会、1～28頁。
- 脇山佳奈 2015 「庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の意義」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、33～42頁。

重圏文鏡出土遺跡・古墳文献

宮崎県西ノ別府遺跡：三品典生編2006『西ノ別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター。熊本県舞野2号石棺：中村幸史朗編1989『銭亀塚古墳』山鹿市教育委員会。大分県亀山古墳：日名子軸軒1911「大分市三芳の古墳発見」『考古学雑誌』第1巻第9号、考古學會、59頁。小林三郎1979「古墳時代初期倭製鏡の側面—重圏文鏡と珠文鏡—」『駿台史学』46、明治大学史学地理学会、78～96頁。佐賀県佐志中通遺跡：岩尾峯希編1997『佐志中通遺跡』唐津市教育委員会。佐賀県永田遺跡：徳永貞紹・白木原 宜・渋谷 格・吉田恵美・内野武史・島 孝寿編2002『柚比遺跡群2』佐賀県教育委員会。白木原 宜編2003『柚比遺跡群4』佐賀県教育委員会。佐賀県中隈山4号墳第3主体部：山田 正・田中正弘編1990『中隈山遺跡概報』基山町教育委員会。福岡県立野古墳：児玉真一編1984『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—5—』福岡県教育委員会。福岡県荻浦遺跡：岡部裕俊編2008『荻浦』前原市教育委員会。福岡県鬼首古墳：後藤守一1926『漢式鏡』雄山閣。佐賀県立博物館編1979『古代九州の遺宝 鏡・玉・剣』佐賀県立博物館。福岡県稲光遺跡：内本重一・長嶺正秀編1998『稲光遺跡I・II地区発掘調査概報』荻田町教育委員会。福岡県谷遺跡：長嶺正秀編1990『谷遺跡調査報告書』荻田町教育委員会。山口県朝田墳墓群8号方形台状墓：山本明彦・前田耕次・山本源太郎・大坪憲一・中村徹也編1983『朝田墳墓群VI』山口県教育委員会。島根県大峠山古墳群：門脇俊彦・吉川 正1972「大峠山古墳群」『島根県邑智郡石見町誌』上巻、石見町、267～269頁。鳥取県三刀屋熊谷2号墳：林 健亮・仁木 聡編2001『熊谷遺跡・要害遺跡』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター。鳥取県博労町遺跡：濱野浩美編2011『博労町遺跡』財団法人米子市教育文化事業団。鳥取県長瀬高浜遺跡：牧本哲雄・井上達也・岩崎康子・岡野雅則編1999『長瀬高浜遺跡VIII園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター。鳥取県青谷上寺地遺跡：北浦弘人編2001『青谷上寺地3』財団法人鳥取県教育文化財団。木村直人・君嶋俊行・野島 永・岡村秀典・廣川 守編2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター。鳥取県古郡家1号墳北棺：鳥取市編1983『新修鳥取市史』第1巻、鳥取市。高田健一・東方仁史編2013『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究』鳥取県立公文書館県史編さん室。広島県

毘沙門台遺跡：植田千佳徳編1993『ひろしまの青銅器』広島県立歴史民俗資料館。善入義信編2012『毘沙門台遺跡発掘調査報告』毘沙門台発掘調査団。広島県下山手4号墳：落田正弘編1994『下山手第4・5号古墳』三次市教育委員会。広島県山ノ神1号墳：脇坂光彦編1983『府中・山ノ神1号古墳発掘調査報告』府中市教育委員会。岡山県一宮天神山2号墳：鎌木義昌・亀田修一1986「一宮天神山古墳群」『岡山県史 考古資料』第18巻、岡山県、249～253頁。岡山県津寺遺跡土坑：高畑知功・中野雅美編1998『津寺遺跡5』岡山県文化財保護協会。岡山県津寺遺跡：亀山行雄・井上 弘・大橋雅也・金田善敬・久保恵里子・小林関士・澤山孝之・島崎 東・高畑知功・中野雅美・長谷川澄博編1996『津寺遺跡3』岡山県教育委員会。岡山県百間川沢田遺跡：平井 勝編1993『百間川沢田遺跡3』岡山県教育委員会。岡山県備前高島遺跡：鎌木義昌1968「備前高島遺跡について—第一次調査概報—」『サヌカイト』1号、岡山理科大学考古学部、1～8頁。神戸市立博物館編2000『特別展海の考古学』神戸市立博物館。愛媛県一助山古墳：岡崎 敬1981「四国における「古鏡」発見地名表」『史淵』第118号、九州大学文学部、195～225頁。愛媛県唐子台第5丘7号墓：芝田幸光・守田五男ほか1974『唐子台遺跡群』今治市教育委員会。愛媛県松木広田遺跡：白石 聡編2002『松木広田遺跡（松木遺跡群）I』今治市教育委員会。愛媛県雉之尾1号墳：岡野 保・西田 栄1970「今治市古国分「雉の尾粘土柳方墳」について」『西四国』第3号、西四国郷土研究会、2～9頁。正岡睦夫1985「今治平野周辺の銅鏡」『遺跡』第27号、遺跡発行会、53～60頁。愛媛県史編さん委員会編1986『愛媛県史 資料編考古』愛媛県史編さん委員会。愛媛県新谷出土：正岡睦夫1985「今治平野周辺出土の銅鏡」『遺跡』第27号、遺跡発行会、53～60頁。愛媛県火内遺跡：阿部勝行・真鍋昭文編1998『火内遺跡・臥間遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター。香川県鉢伏山1号墳：香川県教育委員会編1983「鉢伏山古墳」『新編香川叢書 考古編』新編香川叢書刊行企画委員会、575～577頁。香川県歩渡島1号墳：山田義範編1974『櫃石歩渡島石棺群』山田義範。松本敏三・岩崎 孝編1983『讃岐青銅器図録』瀬戸内歴史民俗資料館。林 正弘・藤好史郎編1983『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報VI』本州四国連絡橋公団・香川県教育委員会。香川県居石遺跡：山元敏裕編1995『居石遺跡』高松市教育委員会。徳島県宮谷古墳：徳島市教育委員会編1990『徳島市文化財だより』No.23・24、徳島市教育委員会。徳島市教育委員会編1990「宮谷古墳」『第11回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』徳島市教育委員会、6～7頁。徳島市教育委員会編1991『徳島市文化財だより』No.25・26、徳島市教育委員会。徳島市教育委員会編1991「宮谷古墳」『第12回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』徳島市教育委員会、6～13頁。兵庫県井の端7号墳：荻 能幸編1996『井の端墳墓群』上郡町教育委員会。島田 拓編2009『井の端古墳群（調査編）』上郡町埋蔵文化財発掘調査報告1、上郡町教育委員会。兵庫県藤江別所遺跡：稲原昭嘉編1996『藤江別所遺跡』明石市教育委員会。兵庫県松本遺跡：菅本宏明・佐伯二郎編1998『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会。兵庫県吉田南遺跡：櫃本誠一2002「吉田南遺跡」『兵庫県の出土古鏡』学生社、108～109頁。兵庫県下坂部遺跡：岡田 務編1981『尼崎市下坂部遺跡（第4次調査報告）』尼崎市教育委員会。兵庫県大滝2号墳：富田好久・亥野 彊・勇 正広・大路 靖編1981『大滝2号墳』西紀・丹南町教育委員会。大阪府溝咋遺跡：合田幸美編2000『溝咋遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター。大阪府鷹塚山遺跡：瀬川芳則編1968『大阪府枚方市鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』鷹塚山遺跡発掘調査団。大阪府久宝寺遺跡：八尾市文化財調査研究会1992「12. 久宝寺遺跡第8次調査（KH91-8）」『平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会、22～24頁。（財）八尾市文化財調査研究会2006『久宝寺遺跡—竜華操車場跡地における調査成果—』（財）八尾市文化財調査研究会。大阪府小倉東遺跡E地区箱式石棺：西田敏秀編2006『小倉東遺跡II』財団法人枚方市文化財研究調査会。大阪府板持3号墳：中村 浩・中西靖人編1967『富田林市板持古墳群調査概報』富田林市教育委員会。富田林市史編集委員会編1985「板持2・3号墳」『富田林市史』第一巻、本文編I、富田林市、394～401頁。和歌山県北田井遺跡：前田敏郎編1971『和歌山県北田井遺跡発掘調査概報』II、和歌山県教育委員会。和歌山県熊野那智大社奉納鏡：前田博雄1982「熊野那智大社奉納鏡類」『和歌山県の文化財』第3巻、清文堂、314～321頁。奈良県篠楽向山古墳：楠元哲夫編1997『大王山遺跡』榛原町教育委員会。奈良県見田・大沢2号墳：亀田博編1982『見田・大沢古墳群』奈良県立橿原考古学研究所。三重県土山遺跡：水口昌也・門田良三編1978『名

張市遺跡調査紀要』名張市教育委員会・名張市遺跡調査会。**三重県向山古墳**：後藤守一1912「伊勢一志郡豊地村の二古式墳」『考古学雑誌』第14巻第3号、日本考古学会、159～171頁。三重県埋蔵文化財センター編1991『第10回三重県埋蔵文化財展 三重の古鏡』三重県埋蔵文化財センター。**三重県善応寺山古墳群**：三重県埋蔵文化財センター編1991『第10回三重県埋蔵文化財展 三重の古鏡』三重県埋蔵文化財センター。**京都府離湖古墳**：浪江庸二・藤原 巧・三浦到・加藤晴彦・林 和広1993『離山古墳・離湖古墳発掘調査概要』網野町教育委員会。**京都府菩提東古墳**：京都府立丹後郷土資料館編1999『丹後発掘』京都府立丹後郷土資料館。**京都府東禅寺1号墳**：田代 弘2002「東禅寺古墳群」『京都府遺跡調査概報』第104冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター、34～42頁。**京都府志高遺跡**：山下 正・肥後弘幸1986「昭和60年度志高遺跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第19号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1～8頁。肥後弘幸編1989『京都府遺跡調査報告書』第12冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター。樋口隆康1991「京都府下近年出土の古鏡に就いて(2)」『京都府埋蔵文化財論集』第2集、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、327～334頁。舞鶴市史編さん委員会編1993『舞鶴市史・通史編(上)』舞鶴市史編さん委員会。**滋賀県下長遺跡**：文化庁編1999「下長遺跡」『発掘された日本列島'95-'99』朝日新聞社、36頁。**滋賀県下味古墳**：鈴木博司・樋口隆康・西谷真治・西田 弘・近江昌司1961「下味古墳」『滋賀県史蹟名勝調査報告』第12冊、滋賀県教育委員会、23～33頁。**滋賀県松原内湖遺跡**：田中勝弘1999「滋賀県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集、220～350頁。**滋賀県高溝遺跡**：宮崎幹也編1990『高溝遺跡』近江町教育委員会。**岐阜県龍門寺14号墳**：檜崎彰一1962『岐阜市長良龍門寺古墳』岐阜市教育委員会。檜崎彰一1969『龍門寺古墳群調査報告』岐阜市教育委員会。**愛知県寺林1号墳**：名古屋博物館編1984『守山の遺跡と遺物』名古屋博物館。(伝)**静岡県鎌田**：岡崎 敬1978『日本における古鏡発見地名表 東海地方』岡崎 敬。**静岡県愛野向山Ⅱ遺跡**：松井一明編2004『愛野向山Ⅱ遺跡－愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書－』袋井市教育委員会。**静岡県小深田遺跡**：山口和夫1982『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅱ、焼津市教育委員会。山口和夫1984「各調査の地区の概要1小深田西遺跡」『焼津市埋蔵文化財発掘調査報』Ⅲ、焼津市教育委員会、6～17頁。焼津市史編纂委員会編2004『焼津市史』通史編 上巻、焼津市史編纂委員会。滝沢 誠2004「小深田遺跡」『焼津市史』資料編一 考古、焼津市史編纂委員会、165～173頁。**静岡県小深田西1号墳第1主体部**：山口和夫1984「各調査の地区の概要1小深田西遺跡」『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ、焼津市教育委員会、6～17頁。滝沢 誠2004「小深田遺跡」『焼津市史』資料編一考古、焼津市史編纂委員会、157～161頁。**静岡県元宮川神明原遺跡**：佐藤達雄編1989『大谷川Ⅳ(遺物・考察編)』本文編・図版編、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。**静岡県土手上遺跡**：池谷信之1997『土上手遺跡(d・e区-1)発掘調査報告書』沼津市教育委員会。**静岡県長崎遺跡**：佐藤達雄編1992『長崎遺跡Ⅱ』(遺構編)、本文編・図版編、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。足立順司・落合高志編1995『長崎遺跡Ⅳ』(遺構編・考察編)、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。**山梨県平林2号墳**：吉岡弘樹・深沢容子編2000『平林2号墳』山梨県埋蔵文化財センター。**長野県大熊片山古墳**：藤森栄一・中村龍雄・後藤・宮坂光昭1969「諏訪市大熊片山古墳」『長野県考古学会誌』第7号、長野県考古学会、11～19頁。長野県史刊行会1988『長野県史考古資料編(遺構・遺物)』全1巻(4)、長野県史刊行会。(伝)**長野県天王山**：長野県史刊行会1988『長野県史考古資料編(遺構・遺物)』全1巻(4)、長野県史刊行会。**長野県篠ノ井遺跡**：西山克己編1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財調査報告書16 篠ノ井遺跡群』財団法人長野県埋蔵文化財センター。**長野県川柳将軍塚古墳**：森本六爾編1929『川柳村将軍塚の研究』岡書院。**長野県飯綱社古墳**：長野県史刊行会1988『長野県史考古資料編(遺構・遺物)』全1巻(4)、長野県史刊行会。**福井県漆谷遺跡**：鈴木篤英編2008『漆谷遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター。**石川県西念・南新保遺跡**：鈴木三男・能城修一・光谷拓実・肥塚隆保・楠 正勝編1998『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会。**石川県田中A遺跡**：橋本澄夫・高瀬 澄編1971『金沢市田中A・B遺跡』石川県教育委員会。**新潟県西川内南遺跡**：野永晃子編2005『西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。**神奈川県永塚下り畑遺跡**：田尾誠敏編2002『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡Ⅳ地点』鎌倉遺跡調査会・下曾我遺跡発掘調査団。**神奈川県万田熊之台遺跡**：平塚市博物

館編1982『夏期特別展掘り起こされた平塚』平塚市博物館。**神奈川県軽井沢横穴**：西川修一1994「神奈川県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集、98～103頁。**神奈川県梶山遺跡**：金澤勇一・川口徳治郎1977『梶山遺跡（4）上台遺跡（予報）』神奈川県立博物館。**神奈川県宮前小台遺跡**：林原利明2002「永塚下り畑遺跡第IV地点K6号住居址出土の銅鏡」『下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第IV地点』鎌倉遺跡調査会・下曾我遺跡発掘調査団、333～340頁。**東京都伊興遺跡**：大場磐男編1975『武蔵伊興遺跡』伊興遺跡調査団。中山俊之・喜多裕明・猪股佳二・寺里和久編1990『伊興遺跡』足立区伊興遺跡公園調査会・足立区教育委員会。実川順一・小田静夫・小林重義編1992『伊興遺跡』足立区伊興遺跡公園調査会・足立区教育委員会。佐々木 彰・大崎美鈴・小鍛冶茂子編1997『東京都足立区伊興遺跡』足立区伊興遺跡調査会。佐々木 彰・水山明宏・三ヶ島誠次男・佐々木美穂子編1999『東京都足立区伊興遺跡Ⅱ』足立区伊興遺跡調査会。**千葉県西初石五丁目遺跡**：栗田則久・木島桂子編2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2』財団法人千葉県教育振興財団。**千葉県戸張一番割遺跡**：平岡和夫編1985『戸張一番割遺跡』柏市教育委員会。**千葉県駒形遺跡**：小金井 靖・山上英誉・前地ひろみ編1982『千倉町埋蔵文化財調査報告書VI—駒形遺跡—』朝夷地区教育委員会。**千葉県大竹遺跡**：田形孝一・稲葉昭智編1993『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ—二又堀遺跡・大竹古墳群（第1分冊）』財団法人君津郡市文化財センター。**千葉県太田・大篠塚遺跡48号住居**：白井久美子1994「千葉県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集、82～95頁。**千葉県北野遺跡5号墳**：平山誠一編1997『森台遺跡群（北野支群）』出光興産株式会社・財団法人山武郡市文化財センター。**千葉県多古台遺跡No.4 地点1号墳・千葉県片野向遺跡**：白井久美子1994「千葉県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集、82～95頁。**群馬県神保下條遺跡**：右島和夫編1992『神保下條遺跡』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。**群馬県淵名1号墳**：永峰光一・亀井正道・塚越甲子郎・金子重量1948「群馬県佐波郡采女村上淵名二子山西古墳群発掘報告」『上代文化』第18輯、國學院大学考古学会、25～30頁。前沢輝政1982『毛野国の研究—古墳時代の解明—』上、現代思想社。**群馬県舞台遺跡**：綿貫邦男編2004『舞台遺跡（2）（古墳時代編）』日本道路公団、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。**群馬県成塚向山1号墳**：深澤敦仁編2008『成塚向山古墳群』東日本高速道路株式会社・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。**群馬県新田東部遺跡**：右島和夫1994「群馬県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集、34～65頁。**栃木県藤本所在古墳**：前沢輝政1982『毛野国の研究』上、現代思潮社。**茨城県勅使塚古墳**：大塚初重・小林三郎1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』2巻3号、東京考古学会、103～122頁。大塚初重1966「茨城県勅使塚古墳」『日本考古学年報』14号、日本考古学年報、141頁。

櫛歯文鏡出土遺跡・古墳文献

鳥取県長瀬高浜遺跡：西松彰滋・笹尾千恵子・大賀靖浩・福嶋慶純・賀須井 智・野島珠美・河田浩介・国田修二郎・名越智津子1983『鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』VI（本文編）、財団法人鳥取県教育文化財団。**愛媛県大木遺跡**：長井教秋1974「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャルリサーチ研究会、24～35頁。村上和馬編1994『魚島村史』自然・歴史編、魚島村。**兵庫県藤江別所遺跡**：稲原昭嘉編1996『藤江別所遺跡』明石文化財調査報告第2冊、明石市教育委員会。**兵庫県宿山1号墳**：櫃本誠一2002『兵庫県の出土古鏡』学生社、223～224頁。**滋賀県蜷谷遺跡**：西田 弘1990「近江の古鏡IV」『文化財教室シリーズ』111、財団法人滋賀県文化財保護協会。**大阪府池島・福万寺遺跡**：廣瀬時習・飯田浩光編2009『池島・福万寺遺跡9』（財）大阪府文化財センター。**長野県地獄沢古墳・長野県飯綱社古墳**：長野県史刊行会1988『長野県史考古資料編（遺構・遺物）』全1巻（4）、長野県史刊行会。

Typology and Periodization of the Juken-mon (Concentric Circle Style) Mirrors

Kana WAKIYAMA

Jukenmon mirrors are small imitative mirrors found in the ruins in Japan from the Late Yayoi period to the early Kofun period. Most of those mirrors were mainly produced at the beginning of the Kofun period. Until now, given the fact that the mirrors are small, several researchers have discussed about the political significance of those artifacts, without being able to reach a consensus.

Therefore, the author has investigated the Jukenmon mirrors, considering their typology, thickness and the shape of their button holes, in order to be able to clarify their appearance background and their significance. As a result, the author suggested four periods in the Jukenmon mirrors production and discussed aspects of each period from the appearance to the decline of those artifacts.

Concerning the production centers, since similar Jukenmon mirrors have been found in very distant places, the author has determined that the mirrors should have been produced in the same area, somewhere in the bronze production centers of the Kinai area. The author concluded that Jukenmon mirrors were the first imitative mirrors which were produced and distributed as prestige goods to local authorities under the control of the Yamato state at the beginning of the Kofun period.